

TEACHING PORTFOLIO

ティーチングポートフォリオ



English and Japanese

佐賀大学文化教育学部・教科教育講座

田中 彰一

作成日 2011 年 3 月 3 日 於サンライフホテル（福岡市）

目次

1) 教育の責任	1
2) 教育の理念	3
3) 教育の戦略と方法	4
4) 評価と成果	7
5) 授業改善に向けた取り組み	8
6) 今後の教育目標	9

添付資料

資料 A : オンラインシラバス例 (担当領域ごと)

資料 B : 学生による授業評価

資料 C : 講義課題例

資料 D : e-Learning 課題例

資料 E : FD 講演会・ワークショップ参加記録

資料 F : 教育実習改善報告書

資料 G : 学生レポートの改善例

資料 H : 教材作成

資料 I : 教育に直接貢献する研究 (論文)

資料 J : 副教材の作成

資料 K : 学生の卒業論文・修士論文

1) 教育の責任

現在所属する文化教育学部教科教育講座では、同学部の学校教育課程の教科教育選修の学生たちを担当していることから、私の教育の責任は、学校現場において「問題解決能力が高い学校教員を育成する」ことであると言える。将来教える立場になるには、教育実習などで模擬的に経験を積みながら、理論研究と実践研究を積み上げて、教育現場での課題を解決できる準備をしておかないといけない。そのためには、単に専門的な知識や能力が高いというだけではだめで、高い意識をもって教育についての今日的な課題を知っていなければならない。そこから自分に必要な技能を身につけられるように、学年進行で進む教育実習と連動した英語指導法の習得カリキュラムを進めている。「小学校英語活動」を1年生後期に開設し、2年生、3年生と進む「フィールド演習 II, III」と合わせて、平成 23 年度から小学校 5・6 年生で必修となる「外国語活動」の指導に強い学生の養成を目指している。

以上を表にすると以下のようなになる。

	学年	課題, 科目など	教育実習関係
1	学部1年次	教育の今日的な課題の理解「小学校英語活動」	教育実践フィールド演習 I
2	学部2年次	1単位の授業開発	教育実践フィールド演習 II
3	学部3年次	1単元の授業開発	教育実践フィールド演習 II 小学校教育実習
4	学部卒業レベル	教職実践演習	中学校教育実習
5	大学院修了レベル	英語科教育実習	高等学校教育実習

さらに、第二の担当領域は、以下の表のように、中学校と高等学校の英語科教員養成のための専門科目がある。

担当科目

種別	科目名	受講者概数	特徴
学部専門科目	専門教育外国語 II	4	必修, 演習,
	教科教育情報論	45	必修, 講義,
	英語科教育課題研究	3-4	必修, 演習,
	英語学概論 I	30-40	英語科教員免許必修, 講義,

	英語学概論Ⅱ	15-25	英語科教員免許選択, 講義,
	英語音声学Ⅰ	20-30	英語科教員免許選択, 講義,
	英語音声学Ⅱ	15-25	英語科教員免許選択, 講義,
	英文法演習Ⅰ	20-30	英語科教員免許選択, 演習,
	英文法演習Ⅱ	15-25	英語科教員免許選択, 演習,
	小学校英語活動	15	選択, 講義
	教育実践フィールド演習Ⅱ(英語活動)	10-12	必修, 演習
教養教育運営 機構	英語 97110000	50-60	必修, 共通基礎基礎教育科目-外国語科目
	ことばの成り立ちと構造 (ことばと発想)	80	選択, 主題科目
	人間社会とコミュニケーション(言語コミュニケーション)	50-60	選択, 主題科目, ネット授業
教育学研究科 (大学院) 科目	英語教育学特論ⅡA	3-6	選択, 講義
	英語教育学特論ⅡB	3-6	選択, 講義
	英語教育学特別演習Ⅱ	2-4	選択, 演習
	英語教育課題研究	2-4	必修, 演習
	実践授業研究	2-4	必修, 演習
	教育実践フィールド研究 (大学院教育実習)	1-2	必修, 演習
短期留学プログラム科目	Japanese and English	8-12	受入留学生用(SPACE)科目

そこでは、中高で英語の授業を行うための英語学分野の専門知識と能力養成を扱っており、言語認識(language awareness)が高い英語教員養成の期待を込めている。授業では、外国語としての英語能力の習得に時間がかかること、また、意欲がなければ長続きせず、長期計画に基づく学習が大事であることを踏まえ、その覚悟が英語を自身で学ぶ際も、教える際にも鍵になることを強調している。

手取り足取りの英語学習を仕組んでも結局は続かないので、「自律的な学習者」になれるような英語能力の開発を自ら進められるようにする情報を関連科目の中で提供するようにしている。合わせて、日本語と英語に対することばの感性を持つことは、コミュニケーション能力との関係で重要であることを指摘し、関連科目の中で繰り返し扱い、定期試験においても出題することを予告し、高い言語認識の育成を目指している。

三つ目の担当領域として大学院科目がある。デリケートな学生が増えてくる中で、大学院における責任は、第二言語習得理論の知識を身につけ、英語教育の実践に応用できるような大学院生を養成することである。大学院生指導においてはそれぞれの課題に基づく研究を支援し、facilitatorとして調査研究の指導助言をしていくように心がけている。

すべての科目について、オンラインシラバス上で講義内容と評価方法を公開している（添付資料 A 参照）。

2) 教育の理念

学生との信頼関係の構築はもっとも基本的な教育理念であるはずである。進路に悩む人生の時期において、よりよい選択を支援できるように努めている。学生からの質問には丁寧に早く答えを出すようにしているが、同時に該当の領域や内容にさらに興味を持ってもらうように努力している。そうした対話から語学研修に参加したり、留学を実現し、ついには海外の大学院で学んでいる学生、あるいはこれまで20年にわたり教員の卵として見送ってきたたくさんの卒業生の姿がある。

ただ、前項の「教育の責任」から明らかのように、私の教育の理念は、「問題解決能力が高い学校教員の育成」へと向かうものでなければならない。学校現場において問題解決能力が高いということは、単に発達障害や特別な支援を必要とする子供たちの教育ができるという意味ではなく、日々の授業において学習の問題が生じる際の対応という普段の取り組みを指している。そのための要素を考えると、「今ここ (here and now)」の教育現場で、i) 何が問題かを把握することができる (認知) ii) 実践の裏付けとなる専門的な知識を知っている (知識)、そして、iii) 臨機応変の対応ができる (技術) ということである。認知する能力は、経験に基づき身につける必要もあるのに対して、知識としての力は、ここでは日本語と英語に関する豊かな「言語認識」や「言語感性」であ

ると考えられる。その知識が基盤となって、技術としての臨機応変の反応ができるようになるはずである。しかも、そうした能力は、それぞれの学びの中で自分で身につけたものでなければ、人に教えることはできない。能力が少しでも身につくことで、学習のモチベーションが上がる。学ぶ意欲が出れば、さらに動機付けは進み、教師に頼らずとも対応できる「自律した学習者」になることができると確信している。

したがって、私の教育の理念は、そのような能力を求める学生を、知識と技術の指導を中心に、認知力の発達を期待して「自律的学習者」として育てることである。私の担当する英語教育の理論的な内容の授業科目においては、知識ベースを育む。「今ここ」の対応をどうすればいいのかを学ぶ絶好の機会である教育実習までに、必要な知識を積み上げておかなければならない。技術力については、教育実習において体験的に学ぶことになる。この2つの能力は、教員養成の理論と実践に対応するものであろう。教員養成という私の責任においては、この教育理念が正しいと思われるが、指導する側としては学生の意欲や動機付けというレベルまで達するような教育になっているかを考えなければならない。そのための方略と方法を次節で考えてみる

3) 教育の戦略と方法

もはや指導者中心の一方的な講義型の授業に大部分の大学生がついてくることができないという事実は文系においても明らかである。講義形式の授業でもある程度の演習を入れないと学生の問題意識の低さから従来のような積極的な自律的学習の期待は持てなくなっている。学校教育課程でも、教育実習改善や授業改善は以前よりも学生の学習方法に沿ったもので考えるようになってきている。自律的な学習者を育成するには、単にこちらが「教える」というのではなく、学生自身に「気づく」という過程を体験させることが重要であるとわかっている。具体的方策として以下のような授業の戦略と方法をとっている。

ただし、担当科目が言語に関係するので、集中的に狭い領域の理解にとどまるのではなく、広く広範囲の知識と関連づけるような授業内容にしており、試験も範囲全体から出題するようにしている。

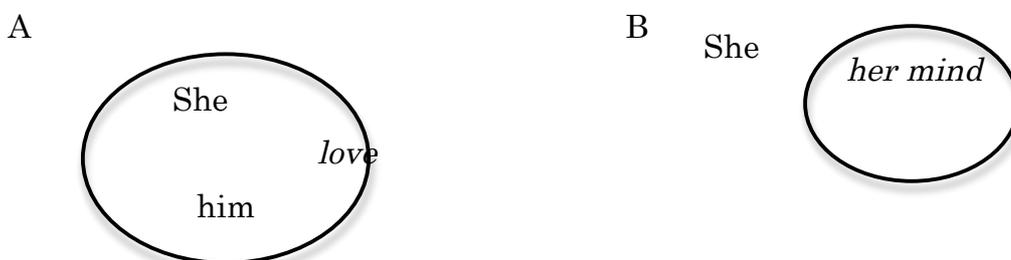
授業における内容と学びの視覚化・音声化の試み

これは学生の認知能力向上を期待する側面である。

視覚化：授業で扱う内容の中で、特に抽象的な概念については、なるべく視覚的な手がかり（図やチャート：添付資料 J 参照）を描かせることをやっており、教員の図との比較をしたりしている。黒板上でそれをおこなうことも多く、授業の最後には黒板いっぱい図や文字があるという授業になる。（授業科目：英語学概論，ことばと発想）たとえば、英語表現の意味を単に知識として教えるのではなく、次のように、視覚的にとらえることができる。

英語表現：She is in love with him.（彼女は恋している。） She is out of her mind.（彼女はおかしくなっている。）

これらの例文を、主語の She と love, mind の位置関係で図示することを試みると、学生に期待するものは以下のような図である。



これらの図からわかることは、A では She が him と同じ love の範囲内にあるということから、love の影響を受けているという比喻表現であることがわかり、She is in the building.（彼女は建物の中にいる。）と基本的に同じ発想であることがわかり、She is in school.（彼女は在学中である。）も理解しやすくなる。B では、She が自分の mind から離れているために、熟語としての意味が出てくることがわかる。このように視覚化することで、空間意識が言語の表現の意味を裏付けているということに気づくのである。ここで英語の意味がわかるというだけの知識が活性化されて、言語認識になっていくと考えている。

音声化：英語の音を実際に発音してみる体験と、どのように聞こえるかの判断をする授業の試み。（授業科目：英語音声学）これは、中学校で学んだ基本的な単語の発音記号通りに音声化する体験学習で、ここでも聴覚により初めて音を意識するということが起こっている。

学習者自身が「教える」ことで学習する試み

これは学生の教育技術の向上を期待すると同時に、相互に学習することを期待する側面である。授業内容として扱う事項の担当を決め、その内容をほかの学生に「教えて」みるという体験をさせている。（授業科目：英文法演習）教員

も質問者になり、マイクロティーチングがうまくいっているかどうかの判断と併せて、授業内容の確認をおこなっている。学生の自覚と論理思考の訓練になると考えている。たとえば、次のような過去完了の用法は、なぜ過去完了でなければならないのかをきちんと理解していないと教えることができない。

By the time we got there, the bus had already gone.

英語の時制表現は体系立てられているので、過去完了の原理をしっかりと理解していなければ、授業で他の学生がわかるように説明することができない。また同じ知識は英語の仮定法の基礎となるので十分に理屈を理解しておく必要があるのである。

授業目標の明示化と評価の厳格化

「自律的な学習者」の養成を目指すことは、学習者である学生自身も自分の学習をモニターするということにつながる。最初の授業で、授業目的と目標を説明することで、求められている学習の伸びを意識させている。評価を甘くすることが意欲向上となることは考えていないので、授業の開始時に、評価基準（試験の比重が6割、授業への参加度が4割）と出席を促すようにしている。特に、外国語習得の科目の性質として、積み上げていく要素が強いため、欠席をするとその分学習が遅れてしまうことを自覚させたいと思っている。具体的に、4回以上の欠席については成績を出さないことを授業初回に説明し、2、3回は減点することも知らせている。（欠席1回については減点しない）ただし、最近では新型インフルエンザや百日咳などの流行があったので、出席については今後授業を補充する手立てを学生に提供する工夫を考えたい。外国語学習に関しては、必要な資格や自身の将来のために、学生自身が勉強するのは当然と考えており、勉強法や参考図書の紹介などを積極的にやっているが、やる気がないと思われる学生にはたらきかけることはあまりやっていないので、その点は課題である。（「6」今後の教育目標」の教養教育担当の教員としての項参照。）

教育実習における指導の緊密化

教育実習は学生が教育技術を身に付ける実際的活動である。教育実習の指導においては、シラバスを整理し、実習校教員との緊密な連携により学生の指導作成、教材作り、研究授業を実現させている。学生は同時進行で、実習ノートに記入することで実習を振り返りながら、レポートを作成する。レポートは、

提出したものをそのまま受け入れず、必ず赤を入れて修正させ、再提出している。実習校の教員もレポートを読み、学生にフィードバックするようにしている。

自主的英語学習会の取り組み

授業科目とは関係がないが、英語力を伸ばすのに苦勞している学生の要望で英語学習会(English Dessert)を呼びかけ、参加している学生の TOEIC のスコアが少しずつ伸びてきている。素材はなるべく易しいものから始めて、英語の語彙力の養成、英語読解の方法、発音の注意など、学習のつまずきを利用して言語認識をつけさせるようにしている。自律的に学習を進められる前の段階でのこのような支援は大事なことであると思っており、何よりやる気のある学生をのばすいい機会になることは疑いようがない。

英語教材の開発とネット授業の教材開発

これらの教材開発は、知識提供型の取り組みとなる。まず、他大学の英語担当者と共著で作りあげた英文法の教材を開発した。(添付資料 H) E-learning におけるネット授業においても 1 コマ分の教材を作成し、課題も作成し、学期ごとに 100 名以上の課題レポートの採点を行っている。(添付資料 D) こうした多数の学習者を意識した授業では、学習の細かいケアがしにくいという問題点もあるが、提供すべき知識のまとめをおこない、必要にして十分な授業内容を組むことができる。

4) 評価と成果

専門教育の学習状況

前項までの授業方法と改善により、「問題解決能力が高い学校教員の育成」を意識し、より高い将来の自分を目指すように促す学生中心の授業展開を考慮したことで、最初は難しく思える内容でも次第に学生の理解が進むような授業を仕組むことができた。(添付資料 B) 授業での学習が進むにつれて、自律的に学び出す学生が出てきている。そのような反応としては、「初めは内容が難しくて理解できなかったが、だんだんとわかるようになった。」や、意欲の喚起を示す「毎回書いたレポートを個別で添削してくれるのはやる気を出させてくれた。」という感想を引くことができる。

教育実習指導の改善

教育実習の取り組みとしては、指導案や模擬授業を丁寧に見て、不適切な箇所の指摘や不足する視点を指摘してあげるやりとりをする中で、「毎回レポートを提出することで自分の考えをまとめることができた。こうすることで、情報として知っておくだけでなく、知識・技能として実習で発揮できそうだ。」という感想を得ることができた。さらに、「学び続ける教員を目指したいです。」という長期的な展望を持てる学生も出てきている。

教育の振り返りと学生の卒業研究、修士論文への貢献

以下のように、自らの実践を振り返り、教育に直接貢献する研究としてまとめているが、実習学校の先生方と協同しながら、授業改善のための提言をまとめた。(以下の A, 添付資料 I) これは自分の教育のよいまとめとなり、問題分析ともなった。

A: 2007 年 3 月「小学校英語活動実践報告-高度教育実習 II: 学生の意識を高める教育実習-」(共著)『佐賀大学教育実践研究』第 23 号

B: 2009 年 3 月「小学校『英語活動』と中学校『英語科』の接続について-ことばとしての英語教育考察-」『佐賀大学教育実践研究』第 25 号 pp. 69-80.

C: 2010 年 1 月「言語理論と英語教育(16)-第二言語習得研究から見た英文法指導のあり方-」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第 14 集第 2 号 pp. 93-102.

D: 2010 年 3 月「小学校英語教員養成課程における『小学校英語活動』について-生活言語としての英語の教育のために-」『佐賀大学教育実践研究』第 26 号 pp. 47-56.

このような「教育に直接貢献する研究」は、学生が取り組む卒業研究や修士論文研究における二次資料となっており、学生にとっても、教員にとってもよい意味での研究共通資料として利用されている。(添付資料 B)

5) 教育改善・授業改善に向けた取り組み

授業評価を利用した授業改善の継続

引き続き授業評価を利用して授業改善を継続する。これまでの評価データからは、予習時間の項目以外では、だいたい平均値か平均値を上回る数値で推移している。(添付資料 B) 上で述べた教育の責任を果たしたものになっている印象はある。

成績不振学生への対応

教育改善のためには、各クラスに数名いる学習に問題がある学生への対応がどうしてもある。場合によっては他の学生に悪い影響を与える可能性も否定できないので、ある程度考えておく必要があることであると思われる。FD 講演会でも発達障害がある学生の存在が指摘されており、実際にその可能性がある学生を受け持ってみると、特に試験の成績が不十分な学生についての対応がある。単に不合格としたり、再試験を課すというやり方をとらず、学習のどこに問題があるかを知るための個人指導として、必ず呼び出すようにしている。なぜ十分な成績をとれないのか、やる気や興味を聞き、その結果で判断するようにしている。

講演会・講習会への参加

教育改善のための方法や授業改善の提案、学生指導上の課題、教育評価のための講演会に参加してきた。(添付資料 E) 特に以下の講演会は、専門領域が近く、全国レベルでの大学生の日本語と英語の能力の実態を知ることができ、佐賀大学の学生の実態に迫ることができた。これまで何となく気づいていたことの裏付けがとれたようである。

FD 講演会 2010.11.17 小野博氏「日本人学生を対象とした日本語・英語教育リメディアル教育から実力養成教育への展開」

全学教養教育の担当科目「英語」に関して、リメディアル教育の実態も参考になった。ただし、その問題は組織的全体的に取り組む必要があるということも合わせて明らかになった。また、ネット授業、e-learning の可能性に関する内容があり、今後の取り組みに活かせるのではないかと思っている。

6) 今後の教育目標

短期的目標

全学教育機構(仮称)が立ち上がり、英語教育の刷新が予定されているため、短期については予断を許さないが、その移行期の2年間について次のように教育目標を立て、そこを目処にこのTPも見直す必要があると考える。

専門教育担当の教員として

専門科目：「問題解決能力が高い学校教員の育成」に向けた取り組みをさらに進めていくが、上に示した期間で、実際の授業で i) 何が問題かを把握することが

できる（認知）ii) 実践の裏付けとなる専門的な知識を知っている（知識）、そして、iii) 臨機応変の対応ができる（技術）という能力の内容を見直し、できる限り明示的に学生に示すにはどうすればよいかを明らかにしたい。

教員が一方的に講義するという講義型の授業形式はもはや学生には通用しないという感じを強く持つようになってきたので、学習者中心の演習授業形態を組み、知識と技術から認知的理解へとつなぐ。学生の「気づき」を促し、自律した学習者へと導いていきたい。

教育実習：教育実習の指導は実地的な活動が多く、時間もかかる点を考慮し、用意している実習資料をさらに充実させ、より効率的に指導できるようにしていきたい。

教養教育担当の教員として

教養「英語」クラスは、語学としては好ましくない大人数クラスではあるが、コミュニケーション指向の授業形態と学生の意欲を引き出すような方策をとっていきたい。英語が積み上げ科目であることはすでに述べたが、欠席する学生をそのままにするのではなく、出席を補充する課題をネット上で提供する可能性、Moodle や他の技術を使った教材開発を行って支援するような方向も検討してみたいと思っている。

高等教育開発センターと留学生センターの英語部門教員として

両センターの英語部門でネイティブ講師達が開講する科目の時間割作成や教務事項を今後も支援することになっている。留学については、派遣に関する英語能力養成クラスをサポートする。

長期的目標

来年度から新学習指導要領による学習が小中高で開始されることを受けて、それに対応できる「問題解決能力が高い学校教員」の育成をおこなっていききたい。英語教育では、佐賀県に小中高大の連携協議会が立ち上がっており、毎年シンポジウムをおこなって時代に合わせた英語教育を考えていく組織作りとなっている。さらに、県教育委員会や教育センター、市教育委員会とも連携をとりながら、広い視野で大学の英語教育を設定し、教育理論と実践に貢献していきたいと考えている。